

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4371200066		
法人名	社会福祉法人姫戸ひかり会		
事業所名	グループホームひかりの園ピハラー館		
所在地	熊本県上天草市松島町今泉1004-1		
自己評価作成日	平成29年1月10日	評価結果市町村受理日	平成29年3月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成29年1月30日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

運営理念、「ピハラー」＝安らぎの場所の実現を目指しています。想い通りにならない人生のなかでどのような状態になろうとも安心してありのままの自分でいられる生活をめざしています。私たちは、老病死の苦しみや悩みを直視し、自らの問題として皆さんと共に歩みたいのです。そして人としての思いやりや優しさ、生きることの厳しさ、悲しみ、そして喜びを、みほとけの大慈悲のひかりの中に分かち合いたいと思います。かけがいのない一人の存在として受け入れられる人と人との出会いが自然に行なわれる生活の実現を願っています。また一人一人の力を引き出した介助が出来るよう、「RX組みの研修」や「動き出しは当事者よりの研修」などへ参加しています。施設内での研修を取り入れたり、外部研修や講師を招いて、今まで培って来られた人生経験を大切にしたいその人らしさを指すために、外入居者、ご家族から信頼されるグループホームをめざしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人とともに地域に根付いた活動を行っており、多彩なメンバー構成で開催される運営推進会議や地域の様々な行事への参加や協力、活発な情報発信等、積極的に地域との連携や交流に努めている。ホーム独自の取り組みとして、個別のより良い暮らしの継続に向けた課題や潜在するニーズの把握に努め、今年度は業務中心から入居者目線での日常に変革を図っている。入居者の自治会(職員のサポートによる自主運営)等特筆出来る事項であり、認知症や高齢化という状況にあっても“らしく”を実現させる等個別支援の追求に向けて固定観念にとらわれず、地域巡回バスの運行や本人のやりたいリスト等によるリビングプラン等、風通しの良い職場環境はアイデアも豊富である。入居者はもとより、職員の個性の発揮を大切にしたい暮らしの場所は、喜怒哀楽や意思の表出が豊かであり、主体的で自由な穏やかな日常を垣間見ることのできるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	運営理念に基づき、入居者の尊厳を大切に「その人がその人らしく生活が送れるよう」支援する。入居者・家族・地域とのより深い信頼関係が構築出来るよう、ホームでも行事などを行い、職員間で共有し、実践している。	入居者が安心して生活できる安らぎの場所を目指し、グループホーム会議の中で理念を想起させながら話し合っている。(例として入居所の暮らしが理念に沿っているか等) 管理者及び全職員が理念を明確に捉え入居者中心の生活及出来る力を引き出し、自信ある日常を支援している。また、年間目標の四半期毎の評価や最終評価を通じ、ベクトルを統一している。地域密着型事業所として地域への啓発も行き届き、深く浸透している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域食堂ふえすた等の行事を開催し、地域の方々に参加して頂いており、交流が続いている。また、日常的には、地域巡回バスでの買い物や馴染みの美容室で理髪され、関係が続けられるようにしている。	地域の中での生活基盤は拡充されていることは、毎年開催される地域食堂イベントや地域住民も利用可能とした地域巡回バスを運行し、通院や買物時等住民との交流を広げている。また、小学生の授業の一環としての訪問や、数ヶ所の保育園からの訪問による交流、地域の環境整備である草刈り等に参加する等地域の一員として活動している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	立地条件としては、地域住民が気軽に立ち寄ってもらえる環境ではないが、地域の小学校や保育園などに来て頂く事で、知って頂ける場をつくっている。また、認知症協力隊の来館もあり、認知症の理解や支援方法を知って頂ける機会を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の中で、入退居状況・外出・外泊等の実績や、様々な活動及び日常の様子を報告を行い、家族や行政、民生委員の方々の意見を伺いサービスの向上に活かしている。	定期的開催されている運営推進会議は、ホームとしてビジョンの説明、活動や入退居状況等を報告し、意見交換が行われている。また、1・2部構成として2部では研修や講演会を組み入れ、年に1回は実践発表会等特徴のある会議となっている。また、地域に開かれたサービスを目指し、外部からの要望や助言をサービス向上に反映することや地域、行政との連携及び交流に反映させるとしてこの会議の意義を明確に捉えている。防災についての説明が自主防災の協議へと発展する等有意義な会議である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域密着型担当者、地区の民生委員に運営推進会議に参加して頂き、ケアサービスや取り組みの実践を報告している。また、施設での行事の際には地区の民生委員や家族、地域住民の参加があり、協力関係が続けられるよう取り組んでいる。	運営推進会議や行事等を通じ、行政との顔の見える関係が出来上がり、熊本地震発生により福祉避難所としての協定について協議している。また社協主催の研修(多職種連携)に参加している。開設以来初めての実地指導を受けたり、行政の依頼によりキャラバンメイトとして積極的に関わる等協働している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年間計画として身体拘束防止の研修を実施しており、身体拘束防止の基本的な理解と対応方法について学ぶ機会を設けている。また、全職員にマニュアルを配布して、意識向上に努めている。	職員によっては、身体拘束の範囲やY字ベルト等を使用しないので知らない、だからこそ研修が重要であるとして、研修を行い、転倒リスク回避にセンサーマットを使用しているが、家族に説明し同意を得ている。また、職員がつい出してしまう「ちょっと待ってください」等に職員同士が注意喚起し、馴れ合いにならないように意識を強化している。入居者の外出傾向(サイン)を把握しているが、離園対策を講じたケースもある。	今後も、職員同士の連携や所在確認を徹底されることが望まれる。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年間計画として高齢者虐待防止の研修を実施しており、高齢者虐待防止の基本的な理解と虐待防止に対する意識が高まるよう努めている。また、全職員にマニュアルを配布して、意識向上に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	年間計画として権利擁護の研修を取り組んでおり、管理者より「権利擁護と命の尊厳」について学ぶ機会を設けている。また、全職員にマニュアルを配布して、意識向上に努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入退居時には、十分な説明を行い同意を得ており、疑問や不安に対して十分な説明を行ない納得して頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	相談や苦情の窓口及び担当職員を明確にしており、入居者及び家族にその利用方法を文書と口頭で伝えている。ホーム内の行事に利用者と家族が参加され、職員との交流の機会を設け、関係作りを行ない、運営推進会議時で様々な意見等が出やすいにアプローチしている。	家族には面会時の状況報告や、受診時の変化等には電話で随時連絡等情報を発信している。家族の悩みや入居相談等丁寧に対応し、ケース記録に残している。入居者自治会が設置され、総会や週2回喫茶店を開き等開かれたホームである。運営推進会議も問題提起の場としている。	行事に家族も参加されており、家族主体での家族会の設置に向け、ご尽力いただきたい。今後も、家族に近況を小まめに発信いただき、家族の忌憚ない意見や提案をサービスに反映されることが期待される。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、グループホーム会議の中で職員が意見を述べられる場を設けている。また、管理者と職員との面談の機会もあり、意見を反映させている。	管理者は、申し送りの場を通し職員とのコミュニケーションを図り、グループホーム会議を開催するにあたり、前もって課題を周知し、考えを持って会議に臨むこととしている。職員間のコミュニケーションの強化に努め、“個”にこだわるケアを実施すべくチーム参加型へと変革を図っている。また、半期ごとに人事考課の中で個人面談を行い、悩みや提案等を収集している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を導入しており、チャレンジシート(目標管理)を使用し、各自の目標に向けて上司と相談しながら取り組める環境がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修については、年間事業計画に添って、研修を実施している。また、外部研修への参加や外部講師を招いての研修等を取り入れ、自己の気づきと利用者への暮らしの支援などについて実践的研修を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	ユニットケアのネットワーク等が開催する研修への参加しており、お年寄りの視点に立ち、“誰のため”何のため”という意識を持ち、現場実践の見直しに取り組んでいる。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居希望時、本人からは認知症により不安な事や要望を直接聞き取る事は困難なケースが多いが、日常的な会話の中からや表情からくみ取り、入居時の移り替わることへの不安が少しでも軽減出来るよう歓迎会の開催や家族への面会依頼を行なっている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	実際に入居者の生活されている状況を見て頂き、不明な点や不安な点に対しその都度説明を行う。また、入居後でも、面会などで不安や要望を聞き取りながら、関係を築いており、担当者会議に家族の参加を促している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時、家族環境、地域との関わり現在利用されている在宅サービス等、現在の状況を踏まえた上で、本当に必要とされているサービスは何かを見極め入居のみでなく、在宅で過ごせる可能性を視野に入れ、他のサービス利用も含めた対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	料理作りや野菜作り、園芸などに関して、教えて頂く機会をつくっている。また、暮らしの中で、昔からの伝統行事(お正月、お盆、お彼岸など)や、昔から伝わる郷土料理など様々な知恵等教えて頂きながら生活を共にできるようにしており、ホーム以外の活動として、地域行事への参加や入居者自治会の活動がある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族が気軽に訪問出来、訪問時は居心地よく過ごせるように積極的に取り組んでいる。和室やリビング、居室に案内し、家族だけで過ごす時間を大切にしている。また、家族と連携を取りながら、外出支援や自宅への帰宅などを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会等として、地域の人達が遊びに來たり立ち寄って頂けるように取り組んでいる。また、同一敷地内で他サービスを利用されている方との懐かしい出会いや友人・知人・親戚・地域住民との関係が途切れないように努めている。	入居者の生活圏をより知り支援されている。地元の敬老会や師匠の水墨画の展示会、彼岸花ウォークin教良木等に出かけたり、神社仏閣参詣等馴染の神社へ出かけると知人からの声掛けも多く、自宅への外出・外泊、同級生の葬儀や法要参列等家族の協力も得ながら支援している。入居者と家族と相談しながらの相撲観戦等ここならではの支援に取り組みは、“らしく 社会人としての生活”に注視した支援である。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の助け合う気持ちは自然な形で見受けられる。その会話や行動(行為)をさりげない形でサポート出来るようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居された後も見舞いに行ったり、退居された家族からも来館あったりと、契約終了後もお互いが行き来しやすい雰囲気づくり心がけ、継続的な関わりを大切にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者一人ひとりの家族構成、職歴、生活歴を把握し、その人の思いを大切に、じっくり向き合い会話の中から、要望をくみ取り、どの場面においてもその人のペースでその人らしく生活していただけるようにリビングプランを作成し支援している。	アセスメントによる把握の他、職員は入居者との日々の関りの中で希望等を収集し、ケアサービスに反映させている。「〇〇が食べたい」等思いをストレートに出される方や、発語はあるもののうまくことばが出さない方には、行動で推察しながらケアに具体的に反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	その人らしい暮らしや尊厳を支えるため、ご本人にとって大切な経験や出来事等含む生活歴を知る事は大切であり、家族やご本人との日々の会話の中から出来るだけ多くの事を知る事が出来るように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの日常の状態を把握し異常の早期発見、早期対応に務めている。毎日バイタル測定し日々の変化に気をつけている。変化については、ケース記録に記載し申し送りを通して全職員へ伝達し、状態、状況の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	一人ひとりにじっくり向き合い、その人らしい生活を送ることが出来るように、本人、家族に思いを聞き、介護計画を作成している。また、担当者会議を開催し、必要な場合は見直しを行っている。	本人・家族の意向を基に、問題点・解決すべき課題を検討し、状態変化等による再チェックや、短期目標6ヶ月毎にフェースシート・アセスメントすべての見直し、モニタリングによりプラン変更の可否を見極めている。入居者の思いである“できる事は続けたい”とする思い等真のニーズをサービス内容に反映させ、「らしく、社会人としての生活”がでできるようなプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の状況については、ケース記録に記録している。それを基にスタッフの意見や思いを計画作成に取り入れるようにしている。状態変化があった場合には、ケア内容の変更を話し合い、職員間の情報共有を行なっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームの入居者の住まいとして、既存に捉われないよう、地域の行事などへ参加しており、在宅での暮らしの継続として、地域との関係が継続できるよう取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地区の民生委員に運営推進会議に参加して頂いたり、地域の催しなどに出掛け、地域交流を図ったりしている。入居者自治会の会議や活動へ参加したり等、意欲的な生活ができるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者又は家族が希望される医療機関を受診し、日頃より状態の変化に対しては報告を行い、急変時、夜間帯も迅速に対応している。また、医療機関への受診することで、医師との連携が図りやすくなった。	もともとのかかりつけ医を基本とし、相談や希望がなければ特養の嘱託医を紹介し、受診を支援しているが、体調によっては往診も行われている。また、外泊を兼ねて家族による受診も行われ結果を共有している。職員は日頃のバイタルチェックや表情観察、母体施設との24時間医療連携により、異常の早期発見や適切な医療支援に繋げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	身心の変化や異常発生時に気軽に相談できるように、特養との医療連携体制を図り、指示や支援を受けている。必要に応じて、協力医療機関の医師に相談にのって頂いている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院後も病院へ足を運び、担当医師、師長等と話し、状態確認に努めている。その時は家族へも同席して頂き、施設側の思い、方向性を伝え、安心して頂けるよう対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居者の健康状態について、随時又は面会時に家族に連絡し、日常の状態についても家族面会時に細かい様子まで伝えている。入居者の心身の状態に異変が見られた時は、その都度家族に連絡し、家族の意向を聞き、対応している。	入居時に指針をもとにホームの方針について説明を行い、最期まで希望するという同意があっても、実際そういう状態になった時点で、再度判断を取ってもらっている。重度化や終末期支援については、法人内研修会も実施されており、今年度ホームでも家族の意向をその都度確認しながらギリギリまでの時間をもたれた方と、実際1名の看取り支援が行われている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	研修として、急変時の対応やバイタル測定方法の研修を行い、緊急時に全職員が適切な対応が出来るようにしている。また、医療連携体制である、特養の看護職員の協力もある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時に迅速に的確な判断、対応が出来るよう年2回の防災訓練や防災体制研修を行っている。また、防災対応心得により、情報共有を行っている。	年2回、母体施設と合同で防災訓練を実施しており、消防署より訓練への参加や立ち入り検査なども行われている。今回の熊本地震では大きな被害がなかったことは幸いであり、災害地へボランティアとして復興支援にあたっている。自然災害について、防災マニュアルをもとに、研修会の中で机上訓練が行われている。また、運営推進会議で議題にあげている。火災は火を出さないことが一番であり、コンセントの埃やプラグの点検の他、一緒に可燃物など野外点検を行っている。	今後もあらゆる災害を想定し、有事に備えていかれることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者一人ひとりの生活歴、その人らしい暮らしや尊厳を支えるために、リビングプランを作成し情報共有出来るようしている。また、年間計画に添って、プライバシー研修も受けている。	「動き出しは当事者より」の姿勢で、一人ひとりを尊重した対応に努めている。呼称は苗字の他、これまでの呼ばれ方など個々に対応している。入浴は可能な限り同性で支援し、シャワー浴も羞恥心に配慮しひざ掛けタオルを使用している。また、管理者は「自分がその立場だったら」を念頭に支援にあたることを指導している。個人情報や守秘義務の徹底について研修会も行われている。	玄関に置かれた面会簿については、個人情報の点から個別記入など検討が必要と思われる。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者一人一人の意思、思いを大切にしている。買い物、外食などを取り入れ自分で決めたり、選択したり出来る場面を多く持っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者個々の動作や会話のスピードなどに合わせて対応している。訴えがあった場合にはゆっくり時間を掛け話を聞き納得されるまで向き合い対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床や入浴の時は、ご本人さんと一緒に衣服を選び、その時に着たい物を選んで頂き、一人一人の個性を大切にしている。希望に応じて行きつけの美容室への外出なども行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者と一緒に地域のスーパーに出掛け、食材を選んだり、旬の食材を取り入れた献立を考え、職員も共に食事し、一人一人の嗜好品を取り入れている。準備、片付けについては、その日の心身の状態を見ながら手伝って頂いている。	菜園のものも使用しながらホームの献立は、旬の野菜を中心に、郷土料理(鯛めし・ぶえん寿司)や季節の食事(おせち・ソーメン流し・バーベキューなど)を取り入れている。食事も食堂だけではなく、陽のあたる居間や気候の良い時はデッキ、桜の下での花見弁当など、季節に応じた場所で雰囲気も楽しんでいる。「人はいつになっても役に立ちたい!」という思いを理解し、一人ひとりが出来ることに関わってもらい、食材購入から一緒に郷土料理を作る機会も持っている。職員は入居者と同じ物を摂っており、和やかな食事の風景であった。	職員はこれから暖かくなればもっと旬の食材を求めて、ドライブを兼ね物産館での食材購入に出かけたいとしており、更に楽しい食事支援に繋がると思われる。実現に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事記録表(食事・水分摂取量)を記載し把握している。食事、水分摂取量が少ない方へは個別対応を行っている。(嗜好品の取り入れ)個々の状態に合わせて、咀嚼、嚥下状態を考慮し多種多様に対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔の清潔を日常的に支援している。1日3回(朝・昼・夕)支援している。必要時は歯科医師などの往診があり、指導を頂いている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者の一人一人の排泄パターンを把握し、一人一人が自立した排泄が出来るよう、入居者の行動等を察知してさりげなく誘導している。また、一人一人の排泄チェックを行い、排泄パターンを把握している。	個々の排泄パターンを把握しており、日中は全員トイレでの排泄であり自立の方が安全に使用できるトイレ環境や、行動で推察し誘導を行っている。排泄は当日の活動や気候、食事で異なってくることから、支援の難しさがあることを認識し、職員によって支援のバラつきが無いよう会議で共有している。夜間のみ使用されるポータブルトイレは清潔に管理されている。排便も自然を心がけ、運動や食事面でも夕食に発芽玄米(苦手な方は白米)を採り入れている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳や食物繊維、唐芋の摂取を、献立作成の際に気をつけている。日常生活においては、散歩等の運動の機会を取り入れ、出来るだけ自然に排便できるよう心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	木製の浴槽を使用して、回数や時間等希望に応じてゆっくり入って頂いている。又気持ち良く入浴して頂くために、RX組の青山先生の指導や研修に参加している。また、個別入浴の介護技術研修を受ける体制がある。	広めの檜風呂が備わった浴槽で、毎日入られる方や最低でも週3回支援されており、中には3人での入浴も楽しませられている。職員が入浴支援の技術を持っていることで、安全でゆっくりと楽しめることから、外部の「お風呂に関する研修会」にも参加している。入居者も「冬至よね〜！」と柚子風呂を楽しんだり、新年2日は「初風呂たい！」など、日本ならではの入浴に喜びの言葉を発せられたようである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠パターンを個別、日別に把握し申し送り時 情報共有し安眠に向けた対応をとっている。一人一人の時間に合わせて入眠支援を行っている。また、昼寝についても個別に対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は、入居者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量を承知しており、入居者の一人一人が医師の指示通りに服薬出来るよう支援し、症状の変化を確認している。必要時には、医療連携体制の看護職員より指示を仰いでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ホームでの暮らしの役割が自然発生的に生じている。その事を支援しつつ、常に自信を高めるような声掛けや働きかけをしている。入居者の出来る事を認め、積極的に声掛けしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	自由に外出の希望を伝えられるような雰囲気作りと、入居者の出掛けたい場所などを日常の会話の中からくみ取りそれを立案し、外出の機会作りを行ったり、家族の協力を得て、外出や外泊の機会がある。また、行事策定委員会の中で、行事計画を立案し外出している。	入居者が外出の希望を伝えやすい雰囲気や職員も表情などから察知し、敷地内の散歩や法人所有の地域巡回バスを使い地域商店などへ買い物に出かけている。また、花見物では菖蒲や紫陽花、敷地内のライトアップされた夜桜も楽しんでいる。また、入居者が地元の祭りに参加できるよう、2ヶ所の神社に出かけている。年末・年始の外泊・外出の機会を身体面や家族の都合にも配慮しながら実現に向けサポートしている。	これまで習われていた水墨画の展示会や大相撲天草場所観覧など希望を把握しながら個別支援に努めている。今後も家族や地域の協力により入居者の外出を支援していきたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の希望により、日常の金銭を管理して頂いている。金銭管理が難しい方であっても、買い物に出掛ける時は財布を持って頂き購入される分の支払いは自己で行って頂くなど、金銭管理能力の維持に努めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの手紙が届くと、返信の援助や電話使用時の援助など、日常的に利用できるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	家庭的な雰囲気有しており、備品等についても家庭的なものをそろえている。入居者が過ごしやすいう、和室やリビングなど自由に過ごせるスペースを確保している。また、季節感が出るように、季節の花を飾りしている。	入居者が思い思いに過ごせる居場所や居心地のよい良い環境を大切にしている。共有スペースは、テーブルやテレビ鑑賞しやすいソファを配置し、畳の間も段上がりフラットの2ヶ所が設けられている。木材の良さを生かした広々としたホーム内で、新聞を広げたり、こたつで横になる方、時代劇の放送に釘付けになる方など好きな場所で寛がれている。また、換気をはじめ衛生管理にも努め、噴霧器による加湿器が置かれている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者が一人になったり、気の合った入居者同士で自由に過ごせるような居場所を確保している(リビング・和室・囲炉裏の間・各居室)		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族へ自宅で使い慣れた馴染みの物の持ち込みを依頼している。一部の方には自宅で使用したものを持ち込み、環境作りを行なっている。個人に応じた介護用品を適切に配置している。	入居の際に使い慣れた品の持ち込みがあると安心して過ごされることを伝えている。ホームでもタンスは用意しているが、自身で持ち込んだ物が使い慣れておられ、ホームの物は衣類収納としては殆ど使用されない方など馴染みの良さが伝わって来る。歩行器やシルバーカー、冷蔵庫や家族の写真など様々な物品が持ち込まれている。また、手作り足ふみ台、入居者と外出先で購入した小物を女性らしく洗面台に配置するなど職員のひと工夫が行われている。	入居者自身がホームの居室を見ながら「一番いい部屋だから！」と語ってくれるなど、満足の度合いが伝わってくる。衣替えなど家族の協力も得られており、引き続き一緒に居心地のよい居室環境に努めていただきたい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレのファンレストテーブルや浴室の構造、共用・個室の手洗いの高さ、調理台の高さや位置、ダイニングテーブルや椅子の高さなど構造的に十分に配慮している。		